

會津八一と「最後の授業」

——Aizu Museum の新たな展開のために

塚原史

1. 過去と未来の連結点としてのMuseum

早稲田大学會津八一記念博物館は2018年に創立20周年を迎えた。私たちの博物館（以下Aizu Museum）の現状の課題と今後の展望については本誌前号に記したので、今回は別の視点から Aizu Museum の新たな展開のために若干の私見を述べさせていただきたい。

まず、1998年開館を記念して刊行された当館『名品図録』巻頭に、当時の総長奥島孝康先生がこう書いておられたことを思い出しておこう——「私はかねてから本学の先人たちの志を受け継ぎ、先人たちの残された作品と資料を中心としながら、広く早稲田文化と称するに相応しい資料体の一端を整理・陳列して、学生たちが過去の文化に学び、新たな知の創造をめざす契機として、博物館の設置を構想してきた。それゆえ、本博物館の発足は、本学の過去と未来の連結点を設けたことを意味する」。

ここで当館の役割を奥島先生が「過去と未来の連結点」として位置づけておられることは、当然のようではあるが重要な示唆を含んでいる。というのも、私たちのミュージアムは「會津八一記念」の名を冠しているが、八一のコレクションや遺品の収蔵・展示を目的とする狭義の「記念館」ではなくて、そうした開館時の財産に、東洋美術や近代美術の名品から考古学関係の貴重な発掘品まで、多彩な作品や学術資料が加わった総合的な University Museum なのである。最近でも、山内清男関係資料（考古学）や大社淑子コレクション（近代美術）など新たにご寄贈いただいた重要な収蔵品は増加の一途をたどっており、まさに「過去と未来の連結点」としての性格が明確になってきているのだが、この意味では、20年前の上述『名品図録』に初代館長高橋榮一先生が寄せられた巻頭言の表題どおり、当館はワセダの「新たなる文化の拠点」の一端を担い続けていることになる。

2. 會津八一とドーナ「最後の授業」（「授業の名残」）翻訳

そのことをひとまず確認した上で會津八一自身の生涯と業績を再考する時、私たちは八一が本学英文科の出身であり「會津〔八一〕の美術史学の研究法は独学でマスターしたもの」（当館元館長大橋一章先生「會津八一と博物館」、同上『名品図録』・当館 HP 参照）だったという事実に変更を気づかされる。詳細は大橋先生の文章をご覧いただきたいが、1903年に、前年東京専門学校から早稲田大学に改称したばかりの本学で、八一は坪内逍遙やラフカディオ・ハーンなど錚々たる教授陣から英文学を学んでおり、とくにハーンからは「英文学史や詩人キーツのほかに民俗学的観察法を学び、これが後年の美術史研究に寄与することになる」と大橋先生は指摘されている。

また同じ頃、従妹の美術学校生を通じて「西洋画や西洋の美術書に接することができ」た（大橋先生）という若き八一は、今にして思えば最晩年のセザンヌ（「水浴図」Les grandes Baigneuses 1906）や青年ピカソ（「アヴィニヨンの娘たち」Les demoiselles d'Avignon 1907）と同時代に学生時代を過ごしていたわけである。もちろん、そうした単なる年代上の一致がその後の會津八一に何らかの影響を及ぼしているわけではなさそうだが、奈良美術・東洋美術研究の先達會津八一の知られざる出発点として記憶にとどめておきたい。

そうした観点から興味深いのは、二十代の八一がほぼ同時代のフランスの短編小説を英訳から翻訳していることで、1904年、23歳で雑誌『北人』第2号に Alphonse Daudet, “La dernière classe”（1873）を匿名の訳文（等閑生訳）で掲載したのである。『北人』について、八一は「石倉小三郎『ゲーテと音楽』書評〔『夕刊ニイガタ』1948年1月24日号〕で「この人〔石倉〕は私が中学を出たばかりで、新潟で『北人』という雑誌を出した頃に、あちらは一高の生徒で、毎号原稿をくれたもので……」と記している。

アルフォンス・ドーデ（1840-1897）の短編集『月曜物語』巻頭に置かれたこの作品は、1870～71年の普仏戦争でフランスが破れてアルザス、ロレーヌ地方がドイツに占領され、学校教育でフランス語が禁止されてドイツ語が強制されたという史実にもとづき、現地の小学校のフランス語の「最後の授業」を一見リアルに描いたフィクションである。日本でもよく知られており、題名は通常「最後の授業」と訳される（英訳でも“The Last Class”）。それを會津八一は「教室の名残」と意識しており、冒頭で「これはこれ佛国十九世紀文壇にありて写実派の領袖とうたわれしアルフォンズ、ドーデー氏〔ママ〕が作に係わるを、例の英訳によりて訳出せしものなり、題して教室の名残という」と述べている。「例の英訳」や掲載誌『北人』の詳細などは専門の研究者に譲るが、あまり知られていない若き日の八一の文章なので、以下に訳文の一部を紹介しておこう。

小説教室の名残（翻訳）

『皆さん、皆さんに私が教えるのは今日限りになりました、ベルリンからアルサスとローレンとの小学校では独逸語の外のものを教えるはならぬという命令が参りまして、新しい先生は明日来られましょう、今日は仏蘭西語の御仕舞いの日ですから、皆さんどうか気を付けて稽古して下さい。』

＊

ハーメル〔ママ・原語では Hamel アメル〕先生は……一国民が一朝他の奴隷となった時に其故国の語を忘れないのは其恥辱の獄（ひとや）を逃るべき鍵を持つが如きものなることなどを語り続け、やがて文典の本を取って授業を始めた。

＊

嗚呼、実に此学校の御仕舞いの日の事は今にも忘れ兼ねる……。ハーメル先生は、やをら青味を帯びた顔で立ち上がった、先生の風采が此時程に立派だったことは嘗て無かったと思う、そしていった、『諸君、皆さん、私は——私は』。といったが、何か障りでもあるらしく、言葉を得続づけなんだが、すぐ黑板の方を向いて、小さい白墨（チョーク）を拾って、黑板一配になる程の大きい字で、『仏蘭西万歳』〔原文は VIVE LA FRANCE !〕と書いた、そして、じっと身を止めて壁の方へ頭を垂れて物もいわず、唯手真似

で、『もう済んだ……帰ってよろしい』（等閑生訳）

ストーリーの展開をたどることは避けるが、英訳からの重訳とはいえ原文に比較的忠実な訳文で、40年間地方の小学校で教えてきた老先生による母国語の「最後の授業」の様子が伝わってくる（史実に即せば、当時独仏国境地方ではフランス語とドイツ語が混在して用いられており、ドーデの短編は「愛国主義」的物語化ではあったが、この点には立ち入らない）。ここで当然ながら気になるのは、八一青年がなぜこの作品を邦訳したのかという点である。もちろんすぐに答えの出る疑問ではないが、「最後の授業」が後世に読み継がれているのは「一国民が一朝他の奴隷となった時に其故国の語を忘れないのは其恥辱の獄（ひとや）を逃るべき鍵を持つが如きものなること……」（原文は次の通り。quand un peuple tombe esclave, tant qu'il tient bien sa langue, c'est comme s'il tenait la clef de sa prison...）という、アメル先生の口を借りてドーデが語ったメッセージによるところが大きいから、八一もこの箇所注目したことはじゅうぶんに考えられるだろう。そうだとすれば、英文科に学んだ會津八一はこの翻訳を通じて自国の言語・文化の重要性を再認識したのかもしれないと、筆者は勝手に想像している。

3. 會津八一と「古典の権威への謬着」の戒め

このへんで私たちの博物館の新たな展開という課題に戻るが、會津八一は1920年、39歳で「日本希臘学会綱領」を起草して、こう述べていた——「我が徒今の世に在りて遠く古の時を想慕すること轉た切なりといへども、徒に古典の権威に謬着するは我が徒の最も醜陋とするところなり。澁澗たる生趣はこれ希臘文物の精髓にして、沈滞停止の裡に之を求むべきにあらざればなり」。

「現代」にあって古典を「想慕」しつつも、「古典の権威に謬着する」ことは「沈滞停止」を招きかねないと、八一は一世紀前に自戒をこめて強調していたのではなかっただろうか。古代から近現代まで、時空を超える人類の遺産の展示・収蔵活動を使命とする Aizu Museum の新たな発展のためにも、忘れられない警句である。筆者が巻頭言を執筆するのは今回が最後になるが、この機会を借りて付言しておきたい。VIVE LE MUSÉE AÏZU！

（會津八一記念博物館館長）

上記引用は會津八一記念博物館開館記念『名品図録』（1998年）、『會津八一全集』第7巻（中央公論社 1969年）にもとづき、旧字旧仮名は原則として（最後の引用以外）新字新仮名に改めた。〔〕内は筆者の補足。

